

令和 5 年 第 1 1 回
富 山 県 教 育 委 員 会 会 議 録

I 開会及び閉会の日時

令和5年10月16日（月）

開会午後1時00分、閉会午後1時54分

II 場所

県庁4階大会議室

III 出席委員

1番	黒田 卓	2番	町野 利道	3番	村上 美也子
4番	坪池 宏	5番	大西 ゆかり	教育長	荻布 佳子

IV 説明出席者

理事・教育次長	水落 仁	教育次長	中崎 健志
参事・教育企画課長	福島 潔		
教育企画課課長（高校跡地活用・学校施設担当）		中家 立雄	
教育企画課課長（ICT教育推進担当）	小林 匠		
生涯学習・文化財室長	辻 ゆかり	教職員課長	板倉 由美子
教育参事・県立学校課長	番留 幸雄	小中学校課長	山尾 佳充
保健体育課長	大島 一恵		

V 傍聴人数 1人

VI 会議の要旨

午後1時00分、教育長が開会を宣する。

1 議決事項

議案第31号 令和5年度教育委員会の事務の点検及び評価結果報告書（令和4年度分）の件
教育企画課長から説明し、原案のとおり可決した。

議案第32号 令和6年度富山県立高等学校入学者募集要項制定の件
県立学校課長から説明し、原案のとおり可決した。

議案第33号 令和6年度富山県立特別支援学校高等部・幼稚部入学者募集要項制定の件
県立学校課長から説明し、原案のとおり可決した。

2 報告事項

(1) 令和5年度「高志の国文学」情景作品コンクールの結果について
生涯学習・文化財室長から説明した。

(2) 令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要について
小中学校課長から説明した。

3 今後の教育委員会等の日程について

教育企画課主幹から説明した。

4 議事

○議案第32号・33号関係

〔坪池委員〕

・通学区域が県下一円となるのは今度の新入生からだが、転入学してくる2年生3年生にも適用されるということがいいですね。

[県立学校課]

・転入学については6年4月1日の入学生からは県下一円だが、それ以前の6年3月31日に在籍する子については普通科においては通学区域の規則通りとなる。なので現1、2、3年生が来年転入学をする際は通学区域が設定された状態で転学することになる。

[坪池委員]

・入ってしまったから、それは関係ないが、他から転入学してくる場合は居住区に関係なく転入学が得られるということか。

[県立学校課]

・そうではなく6年の3月31日に高等学校に在学している者については、通学区域は設定された状態ということだ。

[坪池委員]

・県外から転入して来たケースはどうか。

[県立学校課]

・6年3月31日に高校に在学している場合は県外から転入してくる者についても通学区域は設定された状態ということだ。

[坪池委員]

・6年度、2年生で転学してくる場合も居住区に関係するということか。

[県立学校課長]

・そうだ。その年代の公平性が必要になるからだ。年齢に達していても在学していない場合については全域で受けられるということだ。

[坪池委員]

・わかりました。

○報告事項(2)関係

[坪池委員]

・いまの子ども達の現状を言うと、子ども達の人口密度が減っているので近くに友だちがいない。随分前からだが子ども達が集う空き地のようなところがないということで、今の子ども達の関係は群れ体験が不足しているのではないかと思っている。暴力行為にしても、いじめや不登校についても直接的な関係がどうかということはいろいろ議論があると思うが、そういうものと無関係ではないように私は思う。群れ体験というのは、やっぱり現状では学校でしか積む機会がない。このあたりを教師の方が十分理解して指導にあたってもらいたいと思う。少人数学級が進んでいくと、どうしても教員の手が細かいところまでかかりやすいというようなことがあって、少し距離を置いて眺める姿勢がなかなか難しいのではないかと思う。きめ細かい指導ということの意味ですね。そういうところを把握して、子ども達の群れ体験を支援するような指導をやってほしいと思っている。具体的には文化祭であるとか運動会であるとか部活動であるとか。そういった子ども同士の横の関係ができるように指導してもらいたいなと思っている。学校訪問等あれば、そういう状況のことをまた各学校に伝えてもらいたいなと思う。

[教育長]

・どうもありがとうございます。そういう風にしていかなくてはと思う。

[町野委員]

・この前、埼玉県の自民党で留守番をさせたらハラスメントだという案があって却下されたが、暴力行為もいじめもこの表に出てくる時に、どのレベル以上を検出するという線はたぶん決まっているのだろうと思うが、暴力行為とかいじめを本当に無くす気があるのなら、できるだけ検出を少なくして、きちんと対策を打っていけるようにした方がいいと思うが、その辺はどうか。

[小中学校課長]

・いじめに対しては文科省も大きい小さいに関係なく、すべてをいじめとして認知して対応していこう、大きくなる前に早期発見、早期対応につなげて対応していこうという形でやっているところだ。

〔町野委員〕

- ・検出レベルは県で決めているのか、それとも国が指針みたいなものを出しているのか。

〔小中学校課長〕

- ・いじめに関しては法律があり、基本的には相手がいじめられたということになれば、それはいじめとして認知という形になっている。

〔町野委員〕

- ・是非その辺考慮してやっていただきたいと思う。

〔教育長〕

- ・確かに些細なことで積極的に認知しましょうという方向の趣旨というか、国のガイドラインでなっているが、先ほどのご意見にも関連するかもしれないが、とは言ってもあまりにもすべてにきめ細かく教師が入り込んでということはなかなか無理がある。そこは少し距離をとって眺めるものもあれば、少し入っていったというものもあり、それらすべてこの数字の中に今は入っていると思うので、そのあたりの実際の対応の仕方については精度を上げていく工夫は必要なのかなと思う。

〔町野委員〕

- ・たとえば全体で令和4年度の小学校501件という数字は、これはこれとして公表するとして、この中を3段階位で上位の部分、中位の部分、下位の部分と分けて、その数字を出して公表していくといいと思うが。

〔教育長〕

- ・いま公表した調査は、国の全国的な調査の統計となるので、この調査の中で特別の部分を取り出して独自に公表というのはちょっと仕組み上、難しい部分があるのかなと思う。
- ・確かに対応の仕方として段階があるのではないかというご指摘はその通りかなと思うので、ちょっとそこは勉強して研究したいと思う。

〔大西委員〕

- ・不登校について、令和5年度の事業点検評価にもあったが、不登校の児童・生徒に対してケース会議を実施できているかの割合で、一部の児童・生徒を対象としたケース会議しかできていないという学校もあったと報告がされていた。これを是非、もれなく注意深くケース会議を開いて、きちんとしたアセスメントを行っていただきたいと思う。チームでアプローチすることによって、児童・生徒達の学校に行けない理由は多岐に渡っていると思うが、さらに実際学校に行けないだけではなく引きこもりになってしまって、なかなか社会に自立できなくなっていく人が本当に多くなっていて、成人でも100人に1人が引きこもりだと言われている。私の仕事上、高齢者の方を訪問する仕事なのでよく出会うが、何十年も外に出ていない息子さんがおられる、そういうことを予防するためにもチームで対応していただく、そういう体制づくりをしていただきたいと思う。
- ・引きこもりについて関わっていると、厚生労働省がやっている重層的支援体制整備事業というのがあり、主に福祉とか保健に関わる事業所が参加されるような富山市主催の研修会に出たのだが、参加者の一覧表の中には教育委員会とか学校に関する方の名前がなくて、子どもも関わってくる事業なので不思議に思った。行政の関係の方の参加はあるが、教育にかかわる方の参加がないことを不思議に思った。不登校については去年の教育委員会の中でもふれたが、一人でもクラスの中にいるとすごく先生の負担が大きいというふうにお聞きしたので、是非チームで対応できるようにお願いしたい。

〔教育長〕

- ・ありがとうございました。この報告書でいうと31ページ、限りなく100%に近づけるという目標に対して85.9%。要はすべての不登校の児童・生徒を対象にしても9割に届いていないということで、ここは組織的な対応ということでいけば、きちんとやっていくべきだと思う。
- ・学校は困難を抱えるお子さんを最初にキャッチしやすい立場にあるというふうに言われているし、実際にその通りだと思うので、実際にそのようなお子さんがいるなということであれば、市町村の福祉、児童相談所につなげるということは学校でやっていると思う。よりそういう部署との連携を重視していかななくては思っている。

〔村上委員〕

・全国と比べると、いじめの件数も平均より下だったと思うが、見えていない、見えにくいいじめというのが増えてきていると思うし、見えなくて気がつかなければ、それはそのまま何の手立てもできないような状態に陥ってしまうので、子ども達からのSOSを出しやすい環境を考えていく必要があると思う。アンケートもしているし、パソコンも1人1台持てるようになってくる。何かそこでサインを出してもらって、小さなうちに拾いあげられるような仕組み、誰もが伝えられるような、そういうことを考えていただきたいと思う。富山県だけではなく、自殺をするお子さん、自分で死を選ぶお子さんの数が全国で増えてきている。一旦その命を何とか取り留めても再度自殺を図る、せつかつない命がまたそこで失われるということも現実が増えてきている。こういう重大事案に関しては関わりのあるすべての人達の力を結集して2度とそういう現場につながっていかないような対応を考えていかなければいけないと思う。

・さつき坪池先生がおっしゃったが、群れて遊ぶことの大切さを私達小児科医もすごく感じていて、歩いて転んで触って臭いをかいで、いろんな五感を研ぎ澄ますような体験が少なくなればなるほど子ども達の体と心の健康は保ちにくいととても感じているので、特に小学校の低学年のうちは群れて遊ぶ最大のチャンス、グループ活動等もあるので、そういう機会を通じて是非そういう方面を伸ばしていったらあげることができればと思う。

〔教育長〕

・おっしゃるようにSOSのキャッチの仕方について、ガイドブックを順次作って学校の方に送付したりということもやっているし、またタブレットを活用して、生徒の心理状況を把握しようとしている。そういった市町村の取り組みも始まっている。一番深刻な自殺に至るようなケースは何としてもなくしたいという意識を持って連携して取り組みたいと思っている。

・群れて遊ぶというのはおっしゃる通りだ。幼小保の連携ということもやっているし、小さいうちから五感を使って、いろんな感覚を研ぎ澄ますような、ちょっと痛い目にもあったり喧嘩をしたりというところから、小学校に入っていきなりじゃあ勉強しましょうということではなく、連携という観点をもって子どもの成長を支援していきたいと思っている。

○その他

〔黒田委員〕

・今回教育委員会の事務の点検・評価をされたが、この中で事業に取り組んでそういうことをやっているということで、事務全般ということであると、働き方改革が話題になっていますが、そういうことを今後取り入れていかないと教育委員会の皆さんが疲れ切ってしまうことにもなりかねないので、そういう視点も考えてほしいというのがある。私の専門と関連することをいうとDX、デジタルトランスフォーメーションというのが言われていますが、学校もそうなんです。クラウドを活用しながら、より安全に多様な形でいろんなデータを使っていけるというふうに、少しずつ今までのやり方を変えていくことが重要になってくると思うのですが、そういう意味では端末を配ったところで、みんなある程度終わったかなという感じになっているように思えたりするところもある。

・クラウドの活用は、これまでのパソコンを使って何か作業をするという、いわゆるICTの使い方とかなり意味が違うというか、クラウドをなぜ使うのかがちゃんと伝わっていない。結局学校の先生とかに聞くと、今回パソコンが配られたけれどもハードディスクがほとんどなくて全然保存ができないとか、ソフトが使えないとか、そういうことで結局使っていないという話を聞いたことがある。なので、これは少しずつですが、そういう意識や使い方を変えていかないといけないと思うので、まずは教育委員会の中からそういう取り組みをやっていただけたらいいのではないかなと思う。デジタル化をする本質は何かというと、いろんな人がいろんなことを言っているが、1つは検索できるようにする、データの使いまわしをできるようにする。これは今後は人間が使うのではなくて機械が使っていく、生成AIも出てきていますが、機械がちゃんと理解できるようにデータを使えるように蓄積していくことが大事なんだろう。そういう意味でいくと、今日用意してもらった資料もある意味人間がわかりやすいように、まず紙にプリントアウトして作って、それを取り込んでいる形だと思うのですね。画像の形で取り込んでいるのだからと思う。画像の形で取り込むということの意味もあるのだが、先ほどの検索という意味からいうと、これだと検索がなかなかやりにくい。テキスト認

識して、ある程度できないこともないが、二度手間になってしまう、精度が下がってしまう。それならばオリジナルのファイルをPDFにした方が使いやすいということになっていくのだろうと思う。今までもパソコンを使っていたから、それでいいでしょうということが残っていきがちだと思うので、その辺りちょっと見直していただきたい。学校とのやりとりで、いろんなフォームを作って、ワードやエクセルでこのフォーマットに入れてくださいと送られてくることがあるが、あれも、その後そのデータをどういう風に使うのか。人間がもう一回見てやるのか、自動的に他の使うシステムに流れていくことを想定していれば、結局転記のミスがなくなるわけだ。そういうところで改善できることがあるんじゃないかと思う。一気になかなかできないと思うが、ちょっとそういう意識でやっていただきたい。教育委員会が変わると、学校現場も校務の情報化と言われていますが、学校の校務の情報化というと校務支援システムに入れないといけないのだという話で終始しているみたいで、入れたところに聞くと「あれは校務支援システムじゃなくて校務遅延システムだ」という話になってしまっていると、そういうことを聞くことがある。そうならないためにも、なんでDXにするのか、DXとは一体何なのかというのは少しずつ使いながら理解してもらえないのかと思うので、教育委員会の中でいろんなやりとりされる書類だとか、次年度に向けて、これからに向けて考えてもらえたらいいと思う。

〔教育長〕

・ご指摘どうもありがとうございました。校務支援システムもようやく県立学校に入ったのだが、遅延システムにならないように。日常のいろんな照会物ですとか、やり方も今まで通りではない、ちゃんとデータ化できるとか検索しやすいとか、私たち職員のリテラシーがまだまだ不足している部分があると思うので、そういうものを高める努力も考えていかなければいけないなどお聞きしながら思った。

〔大西委員〕

・先月の教育委員会で申し上げればよかったのかもしれませんが、教員任用候補者名簿が採択されましたと報告を受けたところだが、今年の初めぐらいに新卒の先生方がはじめて先生になられて、いきなりクラス担任をもって、それで疲弊されたり、お仕事を休まれたりしているということを知ったところだったので、新卒の先生がワンステップワンステップ、キャリアを積んでいけるように配慮していただきたいと思う。たとえば1年目で大卒で先生になられた方は担任は担当しないとか、無理なく大事に先生を育てていける環境、優しい環境があることで、そのことが今後教員になりたいと思う学生が増えていくことにつながると思う。

〔教職員課長〕

・最近、新規採用の教員も増えてきている。それは退職者が多い年代に達しており、そういう意味もあって新規採用がここ数年300人程度でずっと増えてきているのだが、その中でおっしゃるように講師経験もない本当に新卒の先生から、長く講師を務められた経験のある方、また民間企業の経験のある方、いろんな方が同じく新規採用というくくりの中に年齢も様々いらっしゃるわけだが、新規の方、特に若い方を対象に新採の先生の指導教員という形でベテランの方をつけるような対応もしているところだ。中にはとまどってというケースもあるとお聞きするので、どういった形で支援をするのがいいのかはこちらも勉強していきたいと思う。先生は採用されるとすぐ先生なわけだから、子ども達にとっては1年目も何年目も皆さん先生になるので、どういう形で若い先生方を支援していくか、また勉強していきたいと思う。

午後1時47分、議事が終了したので教育長が閉会を宣した。